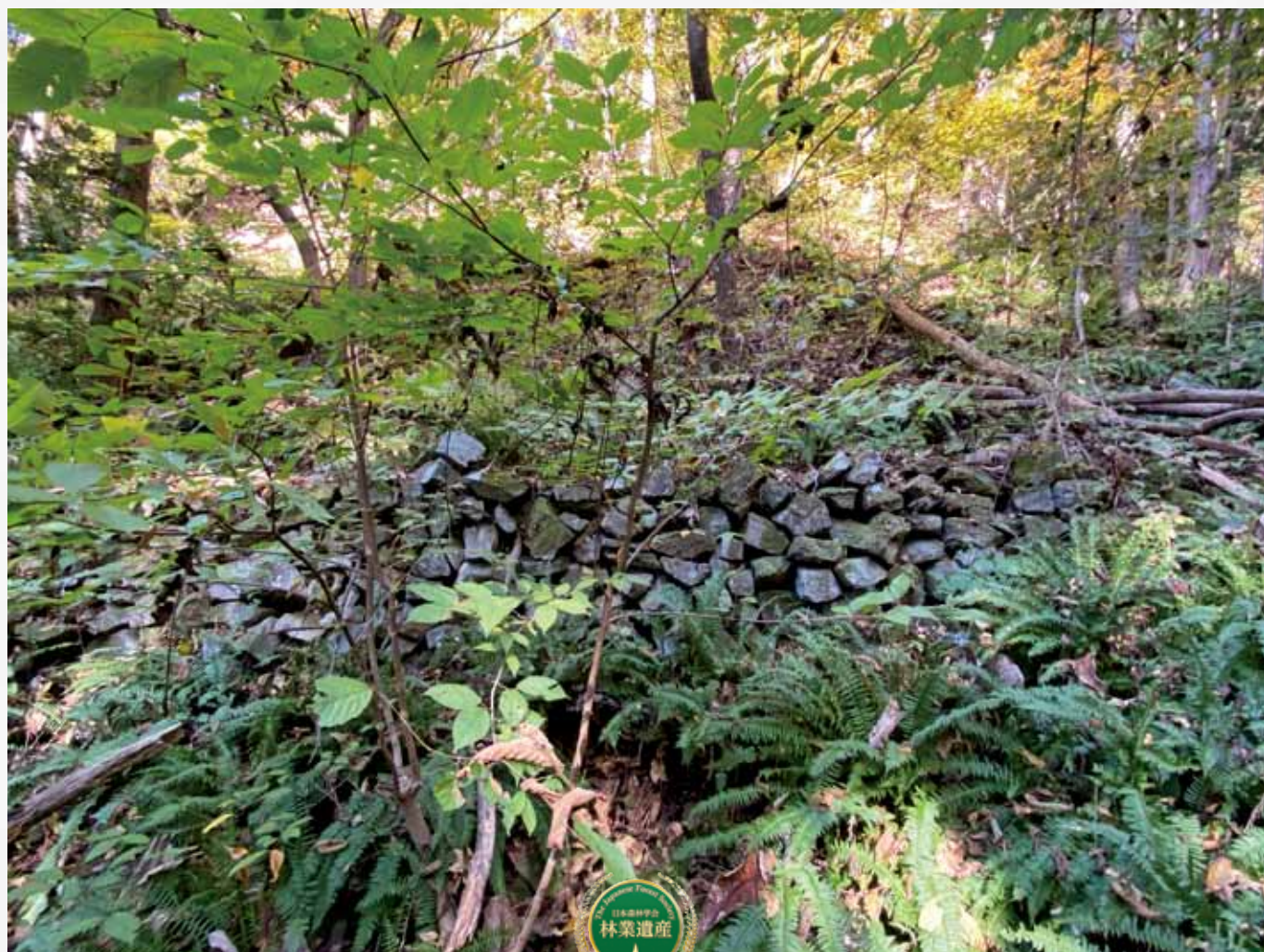


湯野風穴種子貯蔵施設は、林野庁の福島森林管理署が管理する茂庭国有林内（福島県福島市飯坂町湯野）にある遺構です。遺構は流紋岩崖錐斜面の下部に位置し、地元の石材である流紋岩転石でつくられた空石積構造であり、外側が12m×8mの長方形、風穴内部は30㎡（10m×3m）の広さ、高さは2mとなっています。昭和25年9月に作成された福島森林管理署の資料には、「総9坪の風穴庫にして年平均気温6〜7度」と記録されています。一般的な風穴施設は、壁面が石積であつても天井や屋根は木構造ですが、湯野風穴は天井部分までがアーチ型の空石積となっており、石積技術の高さがうかがえます。

大正6年の農商務省「蚕業取締成績」という資料を見ると、「角間風穴蚕種冷蔵所（福島県伊達郡湯野村、冷蔵業者菅野宇市郎）」と記載されており、この風穴が蚕種貯蔵用に利用されてきたことが分かります。風穴による低温環境で、蚕種などの発芽力を低下させない貯蔵が各地で行われていました。しかし、電気冷蔵庫が普及し、大正後半からこうした蚕種貯蔵が衰退し、昭和初期以降は行われなくなりました。

戦後になると、戦時中に荒廃した国土の保全や森林資源の造成を行うため、国レベルでの積極的な植林政策が始ま



湯野風穴種子貯蔵施設の外部

日本森林学会による

日本の林業遺産を知ろう！

第30回

ゆのふうけつ 湯野風穴種子貯蔵施設遺構

日本森林学会 林業遺産選定委員会委員長 京都大学 深町加津枝



アーチ型の空石積の天井



出入口部分内側



高い技術の石積



種子貯蔵容器



内部に設置されていた木製棚



杉皮葺きの木造屋根



周辺の落葉広葉樹林



解説板

りました。植林事業を継続的に行うには、採取から付き付けまで種子を適切に保存し、優良な種子として安定的に確保する必要があります。また種子生産には豊凶があるため、凶作年にも種子を確保しなければならず、豊年に採取した種子を長く貯蔵することが求められました。苗木生産量が急速に拡大したため、国有林では効率的な種苗事業として、スギなどの種子を大量に貯蔵できる風穴を再び利用するようになりました。風穴は、斜面上部の冷気が崖錐斜面の転石内を降下し、風穴石積内に流れ込み、外気よりも低い室温が維持され、こうした条件を満たすことができました。

湯野風穴種子貯蔵施設は、茂庭国有林内にあった蚕種貯蔵風穴跡を昭和24年頃より再利用したものであり、昭和42年まで使われました。施設が使われていた時には、風穴内に多数の種子貯蔵容器が置かれると共に、風穴の上には杉皮葺きの木造屋根が設置され、雨水が内部に侵入するのを防いでいました。現在も施設内には冷風が吹き出し、低温状態が維持され、種子の貯蔵環境が維持されています。また、種子貯蔵容器の一部が残されており、福島営林署（現在の福島森林管理署）をはじめ、福島県中通り地区の郡山、石川、浜通り地区の勿来、白河営林署や会津地区の喜多方営林署からの種子がこの施設に貯蔵されていたことを偲ぶことができます。

現在、安全を確保するため、施設内部への一般入場は制限していますが、外部は見学可能であり、解説板も設置されています。谷沿いの歩道には、施設が利用された頃に遡ると推定される石積みも残っています。周辺には、コナラ、ホオノキ、イタヤカエデなどの多様な落葉広葉樹が分布し、歩道を歩

きながら四季折々の美しい風景を楽しむことができます。

福島森林管理署の地域林政調整官である坂本英男さんは、「湯野風穴のアーチ型石積構造は、2011年の東日本大震災の時に崩壊することなく、現在に至っています。それだけ堅牢な施設だということです。先人の知恵や技術として、また学術的な観点からの知見を蓄積するなどして、この遺構の価値を伝えていきたいと思っています。」と思いを込めて語ってくれました。戦後の種苗供給が急務であった時代から拡大造林期において、福島県内の林業を支えた湯野風穴種子貯蔵施設。この遺構からは林業遺産としての様々な価値を学ぶことができます。湯野風穴種子貯蔵施設は、今も森の中で、静かに長く激動の歴史を伝えているのです。